

活動報告書

報告者氏名: 松下 幹

所属: 高知県立高知ろう学校

記録日: 27年 2月8日

【対象児の情報】

・学年

小学部第4学年

・障害名

聴覚障害 人工内耳 両耳装用

(左CI施術: 2学年 右CI施術: 3学年後期) 人工内耳 (以下CI表示)

情報保障: Roger

・障害と困難の内容

聴覚活用

- ・左CIは、騒音下でなければ音声のみでのコミュニケーションが可能。清音と濁音の弁別が曖昧。
- ・右CIは、期間をおいての施術のため、まだ十分に活用できておらず、環境音や音声を認知することは十分にできにくい状態。

発音

- ・発音は、/r/行の舌尖の動きが弱く、母音が/e/口形になりがちであるため、全体的に明瞭度が低い。

コミュニケーション

- ・左CIは、1対1では音声言語でのコミュニケーションは可能。右CIは、音声言語のみでのやりとりや、話の内容を受容することは困難。
- ・大きな集団での学習や話し合い活動では、まだ、自分の思いや考えを十分に表現しにくい面が見られる。

【活動目的】

・当初のねらい

- ・CI装用後のリハビリを中心とした学習を実施し、「聞く」、「話す」力を身に付ける。
本児の課題に即したアプリ（聞き取り、発音）を効果的に活用し、楽しさを体感しながら練習をすることで「自分から」⇒「できる」を目指していく。
- ・集団の中で、iPadを活用し、不確かな情報を受容、確認し「自分の考えをもつこと」そして、その「考えを表現する」手立てや方法を身に付ける。

・実施期間

平成26年4月24日～平成27年2月5日

・実施者

松下 幹

・実施者と対象児の関係

自立活動担当

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

聴覚活用

聴力レベル（CI 装着時）（左 30 dB～25 dB 右：30～45 dB）

左の CI は、2 年前期に施術。右の CI 施術は、3 年後期に施術。

4 月段階では、左の CI は、活用が進んできており、騒音下でなければ、音声のみでのコミュニケーションがとれるようになってきており、聞き取りの力も向上してきている。右の CI は、間隔をおいて施術のため、まだ、十分に活用できておらず、生活音や音声を認知検出する段階からの指導を開始した。状況や手掛かりに依存した聞き取りが進んできはじめて段階で、聞き取りや発音の学習が継続して必要な状況。指導としては、聞き慣れないことばや音韻数の多い単語、プロソディーが似ていることば等の細かな弁別力を向上させる段階の指導が必要である。清音と濁音の弁別はできるようになったが、新出の言葉については聞き誤ることがある。

発音の状況

母音口形が全体的に /e/ 口形であり、円唇母音の表出は弱い。舌の動きは、/r/ 行の舌尖、前後の動きが不十分で、全体的に発音が不明瞭になりがちである。清音と濁音の表出も曖昧な状態。本児は誤音を認識していないことが多く、間違いを指摘されて言い直すことが多い状態。誤音は、聞こえにくさからきており、聴覚障害児が一般的に発音の学習に対する苦手意識が生じやすい部分でもある。

コミュニケーション

小さな集団の中では、明るく活発で下級生のお世話がよくできるお姉さんのような存在であり、自信をもって活動することができる。

集団学習では、少人数であれば音声言語でのコミュニケーションは可能であるが、交流校での学習や話し合い活動では、話の流れや確かな情報を得ることが難しく、状況判断と部分的な情報のみで、判断行動することがあり、自己の行動が適切でないことが分かると消極的になりがちな面が見られる。

・取組のねらい

聴覚活用

- ①本児の課題に即した「聞き取りの力を向上させるためのアプリ」を効果的に活用することで、楽しさを体感しながら練習をすることで「自分から」⇒「できる」を実感することで、達成感に繋げる。
- ②聴覚を活用する力を育てながら、ことばや文章を類推し、全体的な日本語の力を育てる。

発音

- ①本児の課題に即した「発音の向上を図るためのアプリ」を効果的に活用することで、楽しさを体感しながら練習をすることで「自分から」⇒「できる」を実感することで、達成感に繋げる。
- ②音器の運動を行い、発音明瞭度の向上を図る。

コミュニケーション

- ①自校の集団をはじめ、交流校での集団のなかで、iPad を活用することで、自分の良さを発揮（双方向で話題の共有）しながら、不確かな情報を確認（教師が周辺情報を補う）したり、聞き返し（状況確認ができて分からない時には、自分で使える手段を選ぶ）たり、認めたりするなかで、「自分の考えをもつこと」そして、その「考えを表現する」手立てや方法を身に付け、積極的に周囲の人とかかわる力を身に付ける。

○自立活動の指導

指導時間：月曜日、金曜日については、通常の指導時間：45分 その他については、毎朝：15分

iPad を活用した自立活動を通して、障害による困難を補完するための力を身に付けることや意思疎通の難しさにとらわれることなく情報を受信・発信するためのコミュニケーションツールを身に付ける取組を行う。

また、情報不足を補う手段を身に付けるために、自分から情報を受容する態度を育てながら、iPad を通して

の文字情報を受信する体験をさせることも計画した。このようなねらいのもとに、iPadを活用することで、多くの達成感を味わうことで、「自分から」という前向きな気持ちを育てることをねらいとした。

・取組の実際

聞

◆学習初期には、アプリのマークの可愛さで選択することが多かった。5月中旬ごろには、実際に動物の鳴き声が出るアプリ「無料音ゲーム」を選択することが多くなった。人工内耳を通した鳴き声を聴きながら「こんな鳴き声なんだ・・・。」と色々な鳴き声を確認しながら聴き取り、家畜の鳴き声では、「遠足の時に聞いた鳴き声と同じながや。」とつぶやきながら聞く様子が見られた。



聞き取った動物の鳴き声を「擬音」に替えて表現する。

iPadの音量設定は、初期は、大音量で聞いたり、小さな音量できいたりしながら、自分が聞き取り易い音量を見つけ出し、一番聞こえの良い状態に設定することが6月頃からできるようになってきはじめた。教師は、その音量をアプリの騒音計で確認し、聴覚活用の状況を把握することができた。その場で、必要な機能が簡単に使える操作性は、教師と児童の学習にとっても効果的であった。

◆学習中期には、読みあげ絵本 どこでも読書「タッププラス」を好むようになり、お話の聞き取りと文字を併用して、内容を把握できるようになってきた。自分で、聞こえを試すために目を閉じて聞いたり、文章を紙で隠して音声を聞くようになってきた。教師の指導意図を出さなくても、児童自ら**楽しみながら聴く活動が「聞く」「聴く」「訊く」と自発的な行動**となって高まっていく姿が見られた。教師が、段階を把握した色々なアプリを準備し環境を整えることで、自発的に学習が進んでいくことは、iPadの効果であると考えている。



文字を読みながら「むかし、むかし」のアプリのお話を聴いている。



文章を隠して、「むかし、むかし」のお話のアプリの音声のみを聴き取る。自分で工夫することができるようになってきた。

◆学習後期になると、**自分でお話のアプリの下に表示される文字を隠し、聴き取ったことをメモし、次に、自分で聴き取ったメモの正否を確かめるために、文字を表示しながらお話を再度聴く様子が見られた** この時期から聞き取ることに自信が出てきて、少し難しい課題に挑戦できるようにもなりはじめ、「よく考える」ことができるようになってきた。「N1 ヒアリング」という会話文のアプリをよく選択するようになり、会話文を好むようになってきた。会話を記憶して後で設問に答えるアプリを何度も聞き返し、会話で使われていた言葉「いらっしゃいますよね。きちゃいますよね」等が**日常の生活場面で聞かれるようになった**。このような、聞き取り教材としての価値が高いアプリを手軽に授業で活用することができることはiPadならではの効果であると考えている



お話を聴いて、下に表示される文章を見ずに、自発的に聞き取りを行う。

大人の会話を聴き取って、後の設問に答える。「運転免許の試験のコース」はどのコースなのか、二人の会話を聞いて答えを出す。

話す

発音の学習でも同様に、正誤反応が早く的確にフィードバックすることができる発音練習に適したアプリを選択し、自分の発音の状態を認識し、舌や口の動きを考え、楽しみながら自分の発音に向き合うことで学ぶ力を育てることをねらいとした。

◆学習初期は、誤音を産生している意識が弱い状況であった。発音の指導においては、母音口形が大事で、日々の練習が大事になるがあまり楽しいものではない。しかし、母音の音声認識アプリは、本人の苦手な口形での誤りのある発音では、ターゲットのエリアに入らないため、自己評価でき易いアプリである。そのため、6月頃には、何度も自分で音の出し方を工夫し、自分で作る音を意識するようになってきはじめて。教師が、このアプリを使うことの効果を実感したことは、休み時間にiPadを持ち出し、練習をしており、自分で、メモ機能を使って、①/e/口の形○、声○、舌○と書きながら教室にある鏡を使って自己評価できていたことである。



苦手な音と、母音と比較練習をしている。
苦手な音が、正しいエリアに入るまで、根気よく自分で練習している。



iPadはタブレット端末であるため、操作が容易であり、携帯性が高く、学習したことの振り返りができ易いため、7月頃になると、休み時間等に活用する様子が見られるようになってきた。また、既存の鏡や、鼻息鏡等と組み合わせて活用することで、より効果的に活用できることを教師が実感した。



朝の帯での学習の前に、好きな絵本を、音声と同時に読み上げている。簡単に手間無く、したいと感じた時に活用する。iPadは、自発性を育てることに役立つ。



◆学習後期には、自分で挑戦したことを自己評価できるようになってきはじめた。この頃から、自信がついてきた様子が声の質に現れ、文章を読み上げる時の声や会話の時の音声が大きくはっきりとしてきた。保護者や他の教員からの気付きの言葉「〇〇ちゃん言葉がよく分かるようになったよね。」もきかれるようになってきた。

コミュニケーション～交流学习に向けて～ 交流及び共同学習の日 6月、11月(3日)、2月(各1日)

小学部での生活場面で活発に自分を表現できる力を、集団の中で自分を活かす力とするため、交流校での心配事を本人に聞き取りを行った。

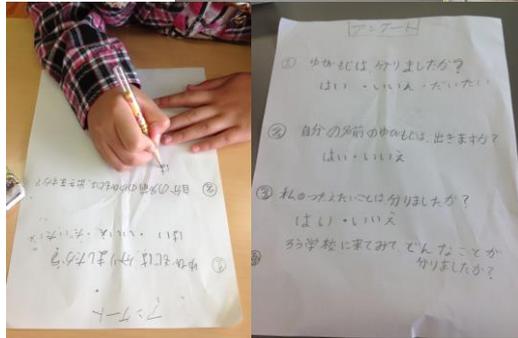
①「失敗すると怒ってしまうんだよね」

自分が考えたことと、友達の言ってくれたことの、「思いのズレ」が原因であることが推測された。

②「人の話を聞かないこともあるんだよね」

聴覚による入力ที่ไม่十分でないことによる「情報のズレ」が考えられた。このような受容面でのズレが、本人が感じる「失敗体験」を生むことで、自己評価が低くなっていると推測された。

そこで、「**たくさんの分かる**」を支えるために、聴覚障害に起因する事項に対しての支援として、前述した「**聴く・話す・考える力**」をつけること、「**情報を取り込むための受容の窓口を拓げる**」こと、そして、「**複数のコミュニケーションツール**」を身に付けるための支援として発音の明瞭度の向上を図ることや情報を送受信するために必要な方法を模索した。



交流学习で伝えたいことは、情報の受容と表出についての内容。先に出された「情報のズレ」を軽減するための方法を友達に伝えることができた。この交流の時間は、丁寧な話し方で、日頃の学習を活かすことができ、発音の明瞭度が高かった。今回の交流校での、情報の受容は、「カンペ」を使って児童自らが要求することにより情報を得ることの効果は大きいと感じていた。メモの紙がない時等は、iPadひとつで双方向性のコミュニケーションツールになることを実感した様子で、「便利やね」とのつぶやきをきくことができた。自分でアンケートを作成した。

黒板前にiPadを置き、はっきりと伝える。1対1のやり取りでは、騒音の中でも話が予測でき、交流校の友達の発言を聴き取ることができた。伝言ゲームの展開では、「カンペ」のアプリを使おうと本人が持ち出してきた。使い慣れているアプリの効果的な使い方を身に付けていると関心した。ゲーム終盤で、騒音で聞き取りにくい時は、「書いて」と友達に伝えることができた。日々の自発的な学習は、とっさの場面にに対応できる力を育てていることに気付かされた。iPadは、本児の働きかけに対する反応が早く、的確にフィードバックすることができる双方向性に長けているため、活用が日常化できると「思いのズレ」や「情報のズレ」の軽減につながることを感じている様子であった。

※アンケート結果で自信をもつことができ、さらに自信をもって交流することができた。

自分自身で学ぶことができる⇒挑戦するとできる・分かる⇒自信となってきた。

日々の学習が自信となったことや円滑にコミュニケーションが図れたことで、自信をもって交流学习できた。

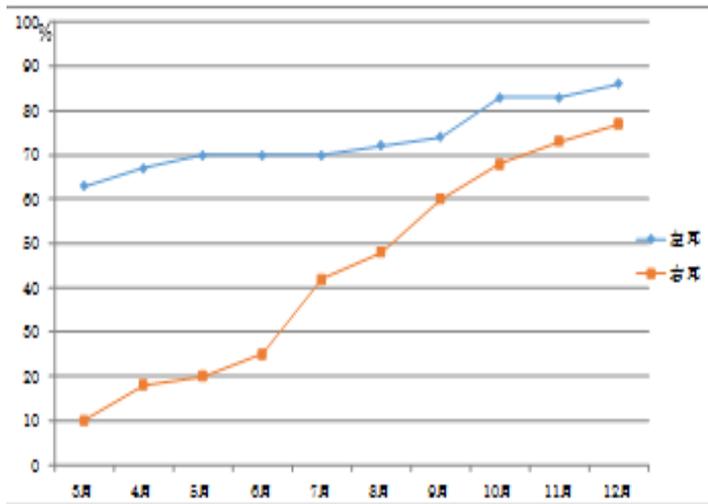
～アンケート～



僕は、〇〇さんに会って、色々なことを学ばせてもらいました。途中割愛……。一つ目は、〇〇さんのような耳の不自由な人の気持ちが分かりました。教えてくれた〇〇さんに感謝します。二つ目は、〇〇さんの努力です。〇〇さんは、耳が不自由なので、手話等を頑張って覚えて、そして、今では、手話もあまりいらなくなりましたと思います…割愛。

【報告者の気づきとエビデンス】

聞 <



67- S読表 第1表 音源 (CD)

iPadを活用することで、自ら『聴きたいという意思』をもって、聞き取りに適したアプリを『自ら選択』し聴き取ることを楽しんだ結果として、聴き取りの力の向上につながったと考える。活用が遅れていた右のCIの言葉の聞き取りが、右のグラフの通り向上し始めた時期とiPadの活用が進んできた時期と同期していることから読み取ることができる。また、「タッププラス」では、苦手とされるリズム学習にも挑戦し、歌に抑揚も出る場面が見られるようになってきている。

聴覚学習では、児童の働きかけに対する正誤反応が早く、的確にフィードバックすることができる聞き取りに適したアプリを自分で選択し、聞き取りの学習を行うことで「分かる」体験を多く経験することができた。させながら、いくつかの情報を総合的に「想像し、考えながら聞く」力をつけることをねらいとした。

児童が選択するためのアプリは、教師が児童の課題に即したアプリを予め準備した。幼児用のアプリから大人用のアプリまで、聞き取りや音のバリエーション豊かなアプリが多く、聞き取りに最適なものが豊富であるため学習した内容を生活に繋げ易いと感じた。

話す

～事前～

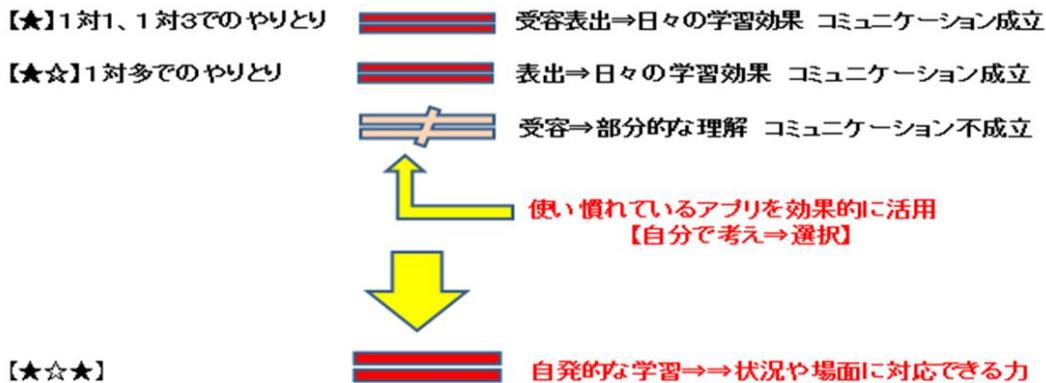
- ・ 誤り音の意識が低い。
- ・ 母音口形、舌位置ともに不安定。
- ・ 清音と濁音の言い分け不十分。

～事後～

- ・ 誤り音の意識が出てきて、自分で評価できるようになった。
- ・ 相手を意識して、分かり易い話し方を心がけるようになった。
- ・ 集団のなかで、本児の話が分かるという評価をもらった。

発音の学習でも同様に、正誤反応が早く的確にフィードバックすることができる発音練習に適したアプリを選択し、自分の発音の状態を認識し、舌や口の動きを考え、楽しみながら自分の発音に向き合うことで学ぶ力を育てる取組の結果 iPad を活用した発音の練習を行ったことで、苦手意識のある「発音」を、自分のこととして認識することができるようになってきた。また、正しい発音と誤音の評価が即時に行われることが、「次はできそうだ」という「やる気」につながってきたと考えられる。

コミュニケーション



コミュニケーション
iPadの双方向性の効果
児童の働きかけに対する反応(正誤情報等)が早く、的確にフィードバックすることができる

【★】【★☆】自分で選択したアプリを使った聞き取りをすると「なぜ?」「どうして?」等の疑問を基にした学習ができ、まちがいを体験しても、「じゃあどうする」という次につながる発展的な学習ができるようになった。自分で選択する学習は、興味・関心、意欲を基盤にしているため、「自分なりに考え、わかる」実感をもつことができる。この経験を積み重ねることが、聞く力や話す力を育て、「考えてやればできる」自信にもつながったと考える。

【★☆☆】聴覚を最大限活用しながら、集団の中で、自分にとって便利な手段となったiPadを効果的に活用することで、情報を総合的に捉えることができるようになり、情報のズレを改善することができた。また、自発的に発音練習を続けたことで、伝える相手を意識した話し方ができるようになり、伝わりにくい部分を自分で認識し、iPadで補うことで、自分らしく表現することができるようになってきた。

このように、iPadを活用することで、聴く・話す力を基盤とした総合的に考える力を身に付ける学習の結果、成功体験を多く積むことができ、自分も「できる」ということを本児童が実感できたことは、今後の学習に取り組む意欲やコミュニケーション態度にも好影響を与えることと思われる。また、交流校の友達とのやりとりのなかで、iPadを仲立ちとして『伝わることを』実感したことは、大きな自信となった。

また、自立活動の視点では、iPadの評価は、客観的に出されるため『失敗』を経験することが多かったが、自問自答しながら工夫し、何度もチャレンジする姿が見られるようになった。自立活動の授業でiPadを活用することは、興味を持って挑戦する楽しさを実感させることができるため、教師主導から子ども主導の授業を展開することにつながったと考えられる。また、このように『成功体験』を積んだことが、「自分から」という自発性を育て「自分らしく生きる」力になったと考える。また、iPadを既存の鏡や、鼻息鏡等と組み合わせて活用することで、より効果的に活用できることを実感した。